

金堂炎上

傑僧、唯識の大家、不東の精神、佐伯定胤の生涯

はじめに

移りゆく 時見る毎に こころ疼く 昔の人し 思ほゆるかも

万葉集巻 20 4483 大伴家持が、橘諸兄や自分の親族への想いをうたった一首である。

2007年、平成19年5月25日、金曜日、雨の中、往診の帰り、田圃の土手で、足を滑らせて、左腓骨、脛骨骨折で、ギブス状態になってしまっていて、最悪のコンディションで、このコラムを仕上げた。

法隆寺は、世界最古の木造建築で、1993年、平成5年12月にユネスコの世界文化遺産に登録されている。そして、奈良は、2010年に平城京遷都1300年を迎える。

平成の時代の今、聖徳太子は存在しなかったことになっているが、飛鳥時代の、607年の創建以来、法隆寺は聖徳太子信仰により守られてきた希有なる寺である。

しかし、明治維新以降の近代化をみると、廃仏毀釈の問題、改修の問題、金堂炎上による壁画の焼失の問題、五重塔の宝塔の問題、大戦での保護、改宗の問題と法隆寺の歴史の中でも、きわめて、窮屈なほど、難題が頻発している。

これらを当時の管主であった佐伯定胤師(さえきじょういん)の対処方法から、法隆寺を見直してみたい。

このコラムは、多くは、集英社文庫から出されている、現在、斑鳩の誓興寺(せんこう)の住職、太田信隆氏が書かかれた『新・法隆寺物語』を参考にまとめたものである。

『新・法隆寺物語』は、佐伯定胤師の伝記でもあり、法隆寺の歴史書で、法相宗、唯識論の解説付きで、わずか、225頁の文庫本であるが、中身は濃く充実していて、非常におもしろい。

唯識論の大家の定胤は、東大で講師まで勤めていた。初講では受講者で満室になっていたが、あまりの難しさに、その数は回毎に激減したという。

この唯識論の解釈の方法は、ただただ、聞いていれば、そのうち理解出来るとし、定胤は、これを『千日聞き流し』と表現していた。毎日受講して、三年はかかる。

鬼才、三島由紀夫でさえも、古京六宗の法相宗の唯識論を理解するために、大谷大学の

山口益氏に手ほどきを受けたほどで、これをもって、『浜松中納言物語』の輪廻転生を参考に書き上げたのが、最後の小説『豊饒の海』である。

さらに、第108代聖徳宗法隆寺管主、高田良信氏が執事長のときに書かれた、『「法隆寺日記」をひらく』を、参考にさせていただいた。これには、法隆寺の歴史のうえで、訂正されなければならない事項が多数、掲載されている。

最後に、このコラムの副題の「不東の精神」というのは、志なかばで、故郷には戻らないことをいう。玄奘三蔵が経の原典を求めて、西方、インドに向かって旅をして、苦難の連続であったが、目的を達するまでは、決して東の故国に帰らないと固く心に誓ったという故事からきている。定胤は、この「不東」を号にしていた。

奈良駅周辺

さて、奈良法隆寺の存在地図から紹介しておく。古都京都には地図の知識は重要ではないが、奈良は、地図を頭の筐におさめておかないと、史実は理解できない。

現在の JR 奈良駅の北東に東大寺、その奥に正倉院があり、北西に平城京跡、その西に唐招提寺があり、奈良駅から JR 関西本線で、南西に下り、郡山、大和小泉の次ぎの駅、3つ目が法隆寺で、ここで下車、その北に法隆寺がある。現在の住所は、奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内1の1で、奈良駅からは約15kmの南西に位置する。

その遠く 20 km 南に藤原宮、橿原神宮、飛鳥寺があり、法隆寺から飛鳥までの道が太子道である。



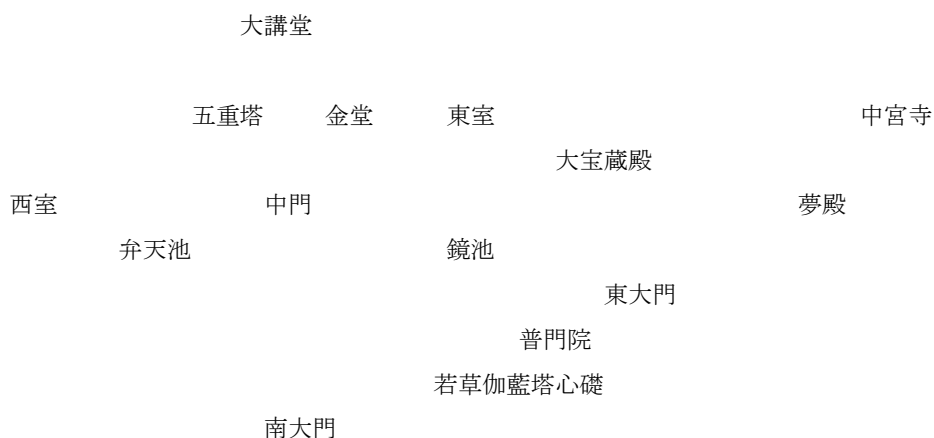
はじめて日本国に寺が建立されたのは蘇我稲目の向原寺といわれ、6世紀中頃で、596年、蘇我馬子が、我が国に本格的仏教寺院を建立したのが、飛鳥寺で、「仏法興隆」を願って、この四文字から、二字を取って、法興寺と名付けられていた。その後、平城京の時代になって、この寺は飛鳥にのこされた。

そして、607年に、聖徳太子が斑鳩(いかるが)に寺を建立し、この寺には、興隆の隆の字を取って、法隆寺と名付けられたが、ほかに、斑鳩寺、七徳寺、聖国寺、宝蔵寺などの呼び名がある。

斑鳩(いかるが)というのは鳥の名前で、椋鳥、ムクドリに似て、鳩という字があてられている。

なぜ、聖徳太子が、飛鳥から離れた、この地に、法隆寺をたてられたのか、という疑問は、聖徳太子が存在していなかったもので、議論にはならない空論となってしまうが、飛鳥と浪速、堺の海との真ん中あたりで、重要な地点であったからと考えられている。

法隆寺境内



広さ 18 万 7 千平方メートルの宏大な境内で、南大門から北にまっすぐ進むと、中門に着き、その右、東側に若草伽藍跡に若草伽藍塔心礎がある。高い土塀の中に、西に五重塔と東側に金堂があり、西院伽藍と、東院伽藍にわけられ、大宝蔵殿をおいて、その東に夢殿、伝法堂、その、やや北東に中宮寺がある。

法隆寺創建

さて、法隆寺は、いつ建てられて、いつの時代から、この建造物が残されているのか。

『日本書紀』の聖徳太子の憲法十七条の記載のあとの、推古天皇の13年に、鞍作鳥(止利仏師)に命じて仏像を作らせ、推古天皇の皇太子、すなわち聖徳太子は、この冬から斑鳩宮にお住まいになり、14年の夏に、できあがった仏像を元興寺(飛鳥寺とおもわれる)の金堂に安置された、と記されており、14年の秋に、天皇は聖徳太子を招き、勝鬘経、法華経を講じさせられ、天皇は喜ばれて、播磨国の水田百町を太子に施され、太子はそれ

を、斑鳩寺、すなわち、法隆寺に納めになったと記載されている。

この斑鳩寺がどのように建築されたのかは記載されていない。ここで、播磨と法隆寺は、かなり距離が離れており、播磨の水田を、斑鳩寺に納めるという意味は不明である（播磨國水田百町施于皇太子。因以納于斑鳩寺）。

聖徳太子が、斑鳩の里に薬師如来を本尊とした伽藍を建てられたのが、法隆寺の最初とされている。これは、金堂の東の間の薬師如来像の光背銘、および、747年に書かれた『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』の記載からで、第30代推古天皇が第29代の用明天皇の御遺志をつがれ、推古天皇15年、607年に斑鳩に寺をたてられたという。

その薬師如来の光背の銘は下記の如くである。

池邊大宮治天下 天皇大御身勞賜時 歳次丙午年召於大王天皇与太子 而誓願賜
我大御病太平欲坐故将造寺 薬師像作仕奉詔然 当時崩賜造不堪者小治田大宮治天下
大王天皇及東宮聖王大命受賜而歳次丁卯年仕奉

池邊大宮は用明天皇のことで、東宮は聖徳太子のこととされている。

用明天皇が、その元年(歳次丙午年)御病に罹らせ賜うた時、推古天皇(大王天皇)と聖徳太子(太子)とをお召しになって、御病御平癒のため、寺と薬師像とお造りにならうとの御誓願をお立てあそばされた。

然るに天皇は、その時、崩御あそばされ、寺も仏像も出来なかつたので、推古天皇(小治田大宮治天下大王天皇)と聖徳太子(東宮聖王)とが御遺志をお継ぎになり、十五年(歳次丁卯年)に完成されたという。

けれども、日本書紀の、その後、天智9年、670年、「夏四月、夜半の後、法隆寺に火災がおこり、一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る」と記載されている。

このことを、菅政友が明治20年に指摘して以来、法隆寺の再建、非再建論が勃発するのである。

法隆寺再建、非再建論

明治20年、石上神社の神主の菅政友(すがまさとも)が、日本書紀の天智天皇9年に法隆寺が全焼したと記載されていることから、現在の建造物は、670年のものであろうとした。

明治29年に、国文学者で天長節の作詞の黒川真頼や小杉愷邨らが、書紀のほか、色葉字類抄や七大寺年表などの文献から、法隆寺が焼けたあと、708年に再建されたと発表した。

しかし、塚田武馬は明治 30 年に『法隆寺伽藍諸堂巡拝記』で、消失したのは法隆寺ではなく、幸隆寺であるとして、法隆寺は再建はされていないのではないかとしている。

その後、この再建、非再建論は建築史学で問題にされ、明治 43 年、伊東忠太の弟子の関野貞、平子鐸嶺が、法隆寺の伽藍の実測調査で、塔、金堂、中門は高麗尺で割り切れることを確認し、このことで、大化の改新以前、すなわち 645 年以前の建築であることを実証した。これで、非再建論に戻ったわけだ。

伊東忠太は、東京駅的设计者でフランス文学者の辰野隆氏の父、辰野金吾の弟子である。伊東忠太は、明治 21 年に『法隆寺建築論』を書き上げている。これがきっかけで、明治 30 年に、やっと、古社寺保存法が制定されている。

しかし、大正 12 年には、国文学者の喜田貞吉が、日本書紀の資料の正当性から、やはり、天智天皇 9 年に、全焼したのだとして、ふたたび、再建論を発表したのである。

一方、斑鳩の「雷おやじ」こと、地元の北畠治房男爵が、南大門から中大門の間の境内の東の若草伽藍(若草は花園の意味)にあった 12 トンもの巨石を、明治 40 年の春に、神戸東灘区住吉の久原房之助に 15,000 円で、かつてに売却したのである。

この巨石は、それから行方不明になっていたが、実は、高田良信の『法隆寺日記をひらく』の再調査では、久原邸が売りに出され、野村證券の祖、野村徳七が、その巨石のおかれた邸宅を購入して、名義変更になっていた。

その、昭和 14 年になって、佐伯定胤が若草伽藍の調査を、当時、京都帝国大学考古学の石田茂作氏に依頼し、同時に、その巨石の搜索のことも相談していたが、どこにもみあたらない。

しかし、ついに、新聞広告で探しあて、神戸東灘区住吉の野村徳七という資産家が保有しているとの情報を入手した。

野村氏は、ただちに、この巨石の返還に応じてくれたものの、この 12 トンもの巨石を法隆寺まで戻すのは大変な作業で、日露戦争で分捕ったロシア製の大砲運搬用無蓋車を借りて、法隆寺駅まで運び、コロを敷いて、駅から法隆寺まで 1 週間がかりで、元の境内に運び込んだのである。

このときには、すでに北畠男爵は死亡していたが、京都大学考古学教室の末永雅雄氏が、男爵の傍証記録と、普門院裏の発掘調査で、もとの位置を特定していた。すなわち、五重塔から 123 間半、夢殿より 263 間で、また、発掘で礎石の方向も同定しており、巨石は普門院の土塀をぶち破り、もとの位置におさめられた。これが昭和 14 年 10 月 22 日のことで、定胤は 72 歳。

そして、この礎石の方位は、法隆寺金堂や五重の塔、大宝蔵殿などの建築方位と、西に 20 度も、ずれていたのである。さらに夢殿の北側の伝法堂の地下遺構の調査で、こちらの方

位と若草伽藍の方位が一致しており、境内の五重塔や金堂と、この礎石の方位が完全にずれていた。

同一境内で、このようなことは考えられず、天智9年に焼失したのは、この若草伽藍であろうとされたのである。これで、再建の論は否定された。

しかし、607年に建てられたことはまちがいないが、誰が建てたのかは未だ不明であり、境内に、若草伽藍、夢殿がどのように配置され、法隆寺の金堂、五重塔との位置関係はどのようにになっていたのかは、不明なのである。

佐伯定胤

ここから、法隆寺の興隆と仏教の発展のために尽力された佐伯定胤を紹介する。第104代の法隆寺管長であるが、明治から昭和にかけて、波瀾の時代の法隆寺を体験された再興の傑僧である。

佐伯定胤(さえきじょういん；1867-1952)は、慶応3年6月25日に、この法隆寺の西側の西里に生まれた。佐伯家は奈良時代からの旧家で、当時は米屋を営んでいた。

先祖は、殺し屋、つまり、645年の大化の改新でクーデターを起こした、佐伯連子麻呂(むらじこまろ)である。

といっても、子麻呂が天皇に表白文(ひょうはくぶん；神仏へささげる文)をよみあげるのを入鹿暗殺の合図に決めていたが、子麻呂があまりの緊張で、すくんで声が出ないので、中大兄皇子がたまりかねて、入鹿の首を刎ねたといわれる。その佐伯氏の子孫である。

定胤は、明治元年が2歳で、五明館に通うが、この明治元年3月に明治政府は『神仏判然令』を發布している。明治9年、10歳のとき、法隆寺の当時の住職の千早定朝のもとで、受戒、得度して仏門にはいり、このとき、母、幾枝は定胤との別れでタコ料理を振る舞うが、その後は、出家仏門の修行の邪魔になると考え、帰宅をゆるさなかった。

7歳から、法隆寺の学僧の佐伯学栄について学んだ。

丁度このころ、廃仏毀釈の時代で、法隆寺も他の寺院と同様に荒(すき)んでいた。

佐伯は、まだ幼子であり、修業に入ったばかりであったが、明治維新後、仏教界は崩壊が激しく、下り坂を転落していた時代で、明治政府の方針で、廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)がおこった。

しかし、実は、政府の方針は、それほど極端なものではなく『神仏判然令』でわかるように、神道と仏教を区別しなさいというところを、国民は、仏教廃止と誤解していた。

慶応4年3月、江戸開城の以前の明治政府が發布した『神仏判然令』は、新政府によると、仏教を排撃するものではなく、長い歴史での神道と仏教の混合、すなわち、「本地垂

迹説」(ほんちすいじゃくせつ)を改め、神道と仏教を区別するようにとの方針をうちだしたのだが、実行されたのは、仏像などの破棄、寺院の崩壊、売却であった。

戊辰戦争の最中のことで、明治政府の政策の内、最悪の令である。この犯人は、神道の平田鐵胤ら、平田神道派の連中の仕業である。

奈良では最初に興福寺が標的にされた。興福寺の一乗院、大乘院の両門跡をはじめ、一山の僧侶 27 人は揃って還俗し、春日大社の神官になっている。これで、興福寺には僧侶はいなくなり、西大寺と唐招提寺が交互に興福寺の管理をおこなっていたが、金堂の仏像、仏具は勝手にもちだされ、二束三文で売却され、ついに、この金堂は警察署および牢獄に利用されてしまう。

一乗院は取り壊され、一時、県庁になり、その後、裁判所となった。大乘院は奈良ホテルになっている。猿沢の池の近くの五重塔、多宝塔が売りにだされ、買い手はなく、これを解体するのに手がかかるといので、焼却しようとしたが、近所への飛び火で大火事になると困るとの住民の声に中止になったという。

東大寺も売りにだされたが、あまりの大きさに取り壊せず、大仏もろとも、北西の山から大砲で砲撃して、壊す案がでた。このときは春日大社から、大社に砲弾が飛んできては困る。神の祟りに合うといので、これも寸前のところで中止になった。東大寺大仏さまにとっては、春日大社は救いの神になったのである。

この、春日大社が、なぜ奈良の東にあるのか。大社は平城京の守護のため創建された神社で、その神は第一殿として、茨城の鹿島神宮から武甕槌命(タケミカズチ)、第二殿は千葉の香取神社から経津主命(フツヌシ)、第三、四殿は大阪の枚岡神社から天兒屋根命(アメノコヤネ)、比売神(ヒメガミ)と、それぞれ、春日にこられた神々が祀られている。これは、称徳天皇の勅により、左大臣藤原永手が創建して、以来、藤原氏の氏神となっていた。この春日大社が、廃仏毀釈で大活躍したのである。

法隆寺では、江戸時代まで、法相宗の聖地で、境内を歩くときは、法衣に五条袈裟を着し、威儀を正すことが義務つけられていたが、この廃仏毀釈以降は村人も寺中に侵入して、牛馬を回廊につなぎ、中門内は尿尿だらけというありさまとなったと『法隆寺日記をひらく』で高田氏は述べている。

このように、明治初期にはじまった廃仏毀釈での仏教崩壊は、フェノロサらの外人文化人によって救われるのであるが、今は、南口重治さんの『切り絵』で、奈良の都の古寺巡礼の風景が満喫できる。とくに、興福寺は、庭の立派な松が、まだ、枯れて撤去される前の堂々たる姿が絵に残されており、後方に聳え立つ五重の塔が、なんと立派に見えることか。奈良、ナラは韓国語で國の意味である。

1880 年、明治 13 年に、父親の喜平が、44 歳で、牛に角で突かれて、事故死している。

定胤は 14 歳であった。

定胤は、京都の清水寺の園部忍慶のもとから、泉湧寺(せんにゅうじ)の佐伯旭雅のもとで、法相宗の唯識論を学んでいたもので、フェノロサには会っていない。

そして、翌年、徴兵検査を受けるために、京都の泉湧寺を離れ、故郷の奈良に帰って久しぶりに実家に戻ろうとしたが、母幾枝は、「あなたは出家したひと。志なかばで、何と気の弱いことか」と叱りつけ、表戸を閉めて、家には定胤をいれなかった。この時、母から『不東の精神』を学んだのである。

フェノロサが、八角のお堂、夢殿の救世観音をみたのは、定胤 18 歳のときで、1884 年、明治 17 年 8 月 16 日からの 5 日間である、とされてきた。

しかし、この日付は、どうも、間違っているようだ。

フェノロサ(1853-1900 ; 嘉永 6 年-明治 33 年、Ernest Fenollosa 、マサチューセッツ生まれ、ハーバード大卒、モースの紹介で、1878 年、明治 11 年、東大の理財学の教授に就任した。明治 23 年に帰国し、その後、ロンドンで客死したが、その墓は琵琶湖の畔の法明寺に五輪の墓石の下に眠っている)は、ビゲローと岡倉天心と鑄金家の加納鉄斎をともなうて、法隆寺の見学におとずれた。

夢殿(739 年、天平 11 年、行信建立)の救世観音のおさめられた大きな厨子の開扉を迫ったが、寺僧は、開帳すると神罰あり、地震がおこり、全寺は壊滅するといひ、禁止になつていたのでと強く断つたが、フェノロサは諦めず、長い抗論となつたといわれている。

米国医師のビゲローも、モースの友人で、フェノロサの来邦以後の明治 14 年に日本に来邦し、1884 年、明治 17 年 8 月 16 日には、フェノロサと岡倉覚三(天心)と一緒に法隆寺を訪れ、この時、伝金岡筆の花鳥図(調べたがどの絵画か不明)をみて感激し、しかし、破損が酷いため、修復代を法隆寺に寄付している。

法隆寺側は、この外人からの金銭をどう取り扱えば良いのか苦慮し、法隆寺側が奈良県に御伺書を提出している。この伺書をみつけだしたのは高田良信氏で、この伺書の日付が、明治 17 年 8 月 22 日である。これも、『法隆寺日記をひらく』にでている。

私のしらべた所でも、フェノロサ著の『東洋美術史網』には救世観音の開扉の日付の記載がなく、天心の『日本美術史』にも、「余は明治 17 年頃」、と記していて、どこにも正確な日付は記載されていない。

一方、法隆寺の「出納方記録」の明治 17 年 8 月 20 日の項には、文部省御用掛岡倉覚三並びに米国フェノロサ氏参、と記載があるものの、ビゲローの名がなく、開扉についても全く記載はない。

高田良信氏の紛失分の法隆寺日記の欠番の発見で、その精読によれば、開扉の事件は、この 2 年後の明治 19 年もしくは、さらに 2 年後の 1888 年、明治 21 年 6 月 8 日であろう

という。

明治 21 年は九鬼図書頭が写真家小川一真(夏目漱石の写真撮影、カラー写真で有名)を同伴し、13 日間をかけて、法隆寺宝物古器物の克明な調査を行い、すべてに検印を附している。この時にも、岡倉、フェノロサが同行している。ビゲローの名は記載されていない。おそらく同行していないと思われる。この日に、救世観音の厨子が開扉されたのだらうと高田氏は主張されている。

救世観音は、聖徳太子を偲んで作られたといわれるが、秘仏になっていて、すでに平安時代の末、保延年間、1140 年の大江親通の『七大寺巡礼私記』に、宝帳が垂れ下がっていて、仏像は拝することができなかつたと記しており、鎌倉時代の法隆寺の僧、顕真の『古今目録抄』にも、今も昔も、その姿は知られていないと書かれている。

その後、どのように保存されていたのか不明で、明治初期には、開帳は不可とされており、秘仏中の秘仏であり、廃仏毀釈でも、難を逃れていた。

フェノロサは、開扉の時の様子を、彼の『東亜美術史網』の第 4 章の上代朝鮮及日本の仏教美術の聖徳太子の紹介のあと、「第六世紀朝鮮美術の偉大なる記念物尚ほ二あり」、として、この救世観音立像を紹介しており、天心は『日本美術史』に記載しているが、この他に、この開扉の様子を記載したものは存在しない。

フェノロサは、1300 年もの間、解錠されたことのない、古い鍵穴に鍵を入れたときの音は、忘れられないといっているが、実は、明治 5 年に一度、政府役人が宝物調査のため、開扉しているという。そうでなければ、千年以上も開かずの鍵を、どこからさがしてくるというのだろうか。一日で探し当てることができるのだろうかという疑問がわく。

そして、救世観音は木綿に完全に覆われていて、この 500 ヤードもあった布を取り除くのに容易ではなく、最後の一片が床に落ち、世界無二の彫刻が眼前にあらわれたときは、声を上げるほどの感動をした、という。フェノロサは、救世観音のあまりの美しさに哲学的観察を述べている。

救世観音は聖徳太子と等身大といわれ、八頭身で、その光背は 123cm とおおきく、蓮華、唐草、連珠紋で、中心は六龍回日がデザインされていて、周囲は火炎模様であり、ガンダーラ美術に近似している。

宝冠の周囲にある曲線の花状纏結は、フェノロサは東亜美術史網の第 4 章の上代朝鮮及日本の仏教美術のなかで、朝鮮美術の永久の記念なりと絶賛している。

衣紋は 5 枚で、その長線、蕭静なる曲線、その襷の取り方も、シンメトリーで、均整がとれていて美しい。

端厳なる御像の、その微笑みは、フェノロサはモナリザだとおもったという。歴史的には、この救世観音のほうが、ダビンチより、はるかに古いにもかかわらず、である。しかし、そのやや俯き加減の目使いや、口元の薄笑いの表情は不気味ともいえる。

そして、最も奇妙なのは、薬壺の支え方で、両手で支えているが、よく見てみると左手は、自然に壺の下に四指を添えて、親指が上の蓋を押えているが、右手は 90° 内旋させて、左手とは上下逆位で薬壺をもっている。その様は奇妙であり、非通常性を感じる。

この薬壺の持ち方は独特で、何か意味があるのだろうか。この点については、フェノロサは「宝珠を把る手は活動状態」と表現している。

和辻は、『古寺巡礼』の最終章の 24 で、救世観音にはインド的な蠱惑はなく、宝珠については、「薬管(くすりばこ)をささえる両の手は力強く肉付けられている」とのみ表現している。

仏像彫刻研究の松原三郎氏は、この両手を重ね、宝珠をもつ形は、中国南朝、三国時代の百済の造像にみられるとしている。しかし、右手の内旋には触れていないが、この像ほど際だった形の作例は他にはないと報告している。

内藤藤一郎氏は、『夢殿と救世観音』の「夢殿本尊救世音菩薩像」の一で、これを如意輪観音の梵篋印の印相とのべておられる。

この救世観音は、未だに秘仏扱いであるが、春秋の、4月11日から5月5日までと、10月22日から11月3日までの2時期だけ、開帳される。

そして、最近では、1987年、昭和62年の修理後、6日間一般公開されたが、この修理の際、像の木材は樟で、像の芯は空洞であったという。楠、樟は霊木といわれている。

明治21年のフェノロサの開扉事件以降、多くの文化人が法隆寺を訪れており、日清戦争の明治28年の秋に正岡子規が法隆寺を訪れている。その一句が有名な「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」で、その句碑は、大正5年に除幕されている。

法隆寺は、古京六宗(法相宗、華嚴宗、戒律宗、三論宗、俱舍宗、成実宗)の法相宗(唯識)であったが、明治12年ごろから、改宗のうごきがあり、一端、唐招提寺や西大寺とともに真言宗となるが、明治9年にはもとの法相宗にもどっている。

定胤は、1903年、明治36年、37歳で、千早定朝のあと、第103代法隆寺管主に就任し、定胤は引退後の昭和25年11月にあらたに、聖徳宗を樹立し、現在にいたっている。

平成の現在、聖徳太子は存在しなかったことになっているが、このことを知って、さぞ、法隆寺裏山の極楽寺に眠る定胤は、怒り狂っているであろう。

明治40年には高浜虚子が『斑鳩物語』を、会津八一は、明治41年に『法隆寺の研究』を書き上げ、そして、和辻哲郎が、この救世観音をみたのは大正7年、1918年である。その『古寺巡礼』は、超ロングセラーで、早熟の高校生のバイブルとなっている。

大和の古仏の、脱宗教的鑑賞は、フェノロサからはじまり、和辻で定着された感があり、今だに、法隆寺は全国の修学旅行のメッカになっている。

明治大帝の崩御まもなく、大正元年、1924年、母幾枝が71歳で死亡。この母の諒闇(りょうあん；喪中)以降、46歳となった定胤は、法隆寺での弟子の教育、唯識論の講話、聖徳太子の奉讃に邁進するのである。

大正10年、1921年、定胤54歳で、聖徳太子奉讃会をおこなっている。会長は徳川頼倫、副会長は渋沢栄一、総裁は久邇宮邦彦王で4月11日に聖徳太子1300年遠忌法要が盛大に、開始され一週間に渡り執り行われた。

雨に煙る斑鳩の浄境に、飛鳥朝その儘の大法要で、絵巻物を展いたような練り行列は総勢600人で、法隆寺に蝟集(いしゅう)した参拝者は全国各地からで総数数万人をこし、多額の寄付金が収集された。

大正13年、1924年、定胤57歳のとき、日中仏教友好の旅で、中国を訪れている。薬師寺の橋本凝胤、東大仏教学者の木村泰賢、西本願寺の島地大等らが随行した。中国から学ぶことは少なく、その後、大正14年に、日本で、増上寺にて、東亜仏教大会が開かれている。

詩人、北原白秋が國醇会一行と、正倉院、唐招提寺、夢殿を訪れたのは昭和3年で、詩集夢殿を発表したのは昭和14年である。

北原白秋の奈良の春の法隆寺にての夢殿には、わずか4首であるが、その中の一首、「夢殿に太子ましましかくしこそ春の一日は闌(ふ)けにたりけめ」は、奈良のロマンをうたった傑作である。

昭和4年には、定胤から、捨身餓虎(しゃしんがこ；修行で三宝に供養し、その身は飢えた虎にあたえる。捨て身の修行をいい、最上の布施行)、雪山半偈(せつせんはんげ；涅槃経にかかっている、諸行無常偈ともいい、釈迦の雪山での修行で、帝釈天が羅刹に化けて、この偈を教えてくれた、是生滅法、生滅滅已)の説明をうけた成蹊高等女学校の奥田正造校長と、武田薬品の武田長兵衛とで、明恵上人の生誕地、和歌山の有田に小旅行をおこなった。

この時、船で、湯浅湾に出て、船上で、茶人の奥田が茶を点てた。その茶碗を定胤の前に置くと、ふるまわれた定胤は、自らの口にせず、スーと手をのばして、海面に、その茶を注いだ。

武田も奥田も怪訝な顔をしていると、「まず、明恵上人に献じたのでござる」といって、残りの茶を飲み干したという。

このように、定胤は、礼儀には細心をもって作法にあたったのである。

夏安居、げあんご、といっ、夏の説法では、唯識論の講讃をおこなっていたが、ある

日、若い製薬会社の社長内藤豊次が、この講話に出席していた。

この時、定胤は、「薬には甘いものもあれば、苦いものもある」と話したところ、社長は膝をたたいて、急にたちあがり、会社にもどった。

糖衣錠を思い付いたのである。この時、ビタミンの糖衣錠が発明されたという。

昭和の大修理

古い文化財は修理が必要だ。昭和 9 年から国の補助で、約 10 年計画で、法隆寺の大修理を行うことがきまった。定胤が、歴史学者の荻野仲三郎と、國にかけあって、初年度は 12 万円の修理費がみとめられた。定胤が 67 歳の時で、協議会委員は、伊東忠太、荻野仲三郎、黒板勝美、滝精一、武田五一である。

食堂からはじまり、五重塔、金堂が最後にまわされた。とくに、金堂には壁画があるので、どのように修理するかが問題になったが、國の方は、壁画を抜き取って、解体しようとしたが、定胤は、猛反発した。國はこの方法を諦め、壁画の模写をすすめた。

金堂壁画

壁画は、金堂の東中央より時計まわりに、1 から 12 まで符号されており、大壁 4 面、小壁 8 面である。

和銅のころ画かれ、その雄大な構図、優美精巧な描法、華麗な色彩は国宝中の国宝で、世界の至宝であり、この写真撮影は便利堂が、大正 5 年におこなっていたが、原寸大での模写が必要であった。

昭和 22 年に、春山武松が、その著書、『法隆寺壁畫』に、この便利堂の撮影した写真が掲載されているので、10 号壁の阿弥陀浄土の写真を公開しておく。これは金堂炎上で壁画を焼損する前の貴重な写真である。



春山は芦屋に住んでいたが、長年の法隆寺壁画の研究をまとめた原稿は、戦時中はブリキ灌におさめて、土中に埋めて保管し、戦後、昭和 22 年に B4 版の大書で、朝日新聞社から刊行された、

その第三編に載っているが、岡倉天心は、「まだ法隆寺の壁画を見たことのない人は幸福だ。あの素晴らしい最初の驚嘆を、これからも味わう機会がのこっているのだから」、と人によく語っていたと記している。しかし、金堂炎上の前の話で、昭和 24 年 1 月以降は、二度と本物はみられなくなってしまった。

壁画の符号と、画かれている菩薩は下記のごとくである。

1号壁	釈迦浄土変
2号壁	日光菩薩、半跏
3号壁	観音菩薩
4号壁	勢至菩薩
5号壁	月光菩薩、半跏
6号壁	阿弥陀浄土変
7号壁	観音菩薩
8号壁	文殊菩薩
9号壁	弥勒浄土変
10号壁	阿弥陀、薬師浄土変
11号壁	普賢菩薩
12号壁	十一面観音

各壁画の寸法は様々で、幅は 5.11 尺から 8.8 尺までで、高さは、10.24 尺から 10.38 尺までであり、各壁への阿弥陀及び菩薩の配置は、のち、空海がもっにかえった密教での金剛界曼荼羅の方位に同じで、五智体系であることが解る。

即ち、10号が北で、不空成就で、薬師浄土で、東の1号に阿閼、釈迦浄土で、南は宝生、3、4号の菩薩で、西が6号の無量寿、阿弥陀浄土とかんがえられる。これは私の見当で、春山は太子伝私記から考察している。

このうち、第1号は、盗難破損にあい、鎌倉時代の貞永年間に改作されたといわれ、塗料の科学的分析研究まで行われたことがあったが、結果は否定的で、やはり、和銅時代のものと同定されている。

金堂内は暗く、模写には光源が必要だ。

当時、昭和15年、潜水艦内の照明に、無熱の蛍光灯が東京芝浦電気マツダ研究所が発案していた。蛍光灯は、まだ、一般化されていなかったが、これを利用し、模写がはじまった。

壁画に光があてられると、その美しさ、鮮やかさに、皆、讃歎の声をもらしたといわれている。

しかし、すでに明治20年に桜井香雲が模写しており、これは今、東京国立博物館に納められている。

明治27年には、大塚榛山が六号壁を模写している。

昭和6年には、鈴木空如が十二面全面模写をおこなった。これは、リッカーミシンが所蔵している。

昭和 14 年、國はあらたに、伊東忠太を委員長として、法隆寺壁画保存委員会が設立され、模写には 26 名の日本画家がえられ、入江並光、荒井寛方、中村岳陵、橋本明治の各画伯を班長として、大壁画四面、小壁八面の模写がはじまった。

昭和 15 年から着手されたが、どの斑が、どの壁をえらぶかは籤でおこなわれ、6 号壁の阿弥陀浄土変は入江斑の林司馬があたった。昭和 10 年に便利堂がおこなった原寸大のコロタイプ版の複製を参考にあげ、写し法でおこなわれた。

しかし、大戦開戦で、みな徴兵されて、模写継続が困難となり、仕事は遅々として、捗らない。

この大戦中は、本土襲撃でも、奈良、京都を省くようにと、親日家のボストン美術館長ラングドン・ウォーナーらが指示がだしていた。これにより、法隆寺は戦災からまもられていたのである。

この事は、ハーバード大学フォッグ美術館にある、ウォーナー研究室の遺影の下段に、日本語で説明文が記載されていることを、昭和 56 年に高田氏が確認している。

境内は、五重塔は解体され、仏像は疎開しており、金堂だけがポツリとのこされていた。終戦後は畑となっていた。

戦後、ポツリポツリと画家たちは帰還し、模写が再開されていた。中に戦死された方もいた。敗戦での貧困、食糧難、暑さでの模写の仕事は過酷である。

特に、奈良の冬は寒い。冷え込みも強烈で、模写の画家に病人まででる始末で、諦めて辞める人も続出する。

この対策として、高島屋から電気座布団が購入された。しかし、火の用心で、帰宅のときは元スイッチを切ることは厳重におこなわれていた。

金堂炎上

1949 年、昭和 24 年 1 月 26 日の午前 6 時 56 分、金堂に火の手が上がった。

気温 1.7 度と極寒、湿度 94 % と曇り、風速 0.4 メーター、でドンヨリした、真冬で、夜が完全に明けきれない時刻で、法隆寺の駅からも、薄暗い空に炎煙が上っているのがみえる。

定胤管主は、この日の午前 5 時、勤行のため聖霊院へ参拝したが、その時は、何等異常は感じなかったし、焦げるような匂いもなかったというのに、わずか 2 時間あまりの後の 7 時には、金堂は火の海と化している。

後の、捜査に、この勤行に同行した執務長の吉田覚胤が、なにか、においがしたように思うが、別に気にもしなかったと証言している。

火はみるみるうちに、金堂を焼き、定胤が、西岡棟梁が駆けつける。消防団が駆けつける。大黒屋に寄宿していた、壁画模写の画家たちも駆けつけ、近所くの住民もサイレンの音をきいて、寺中に集まってきた。

消火団が、大正 14 年に文化財保存の工事のときに設置され、そのときに設けられた強力な放水力のホースを三人がかりで押さえて撥水した。一端、弱火になったとみて、消防団員が堂内に入り込み、壁を鳶口で破壊しはじめた。あっというまに、6 号壁の阿弥陀の顔面部がドサリと落下し、ポカリと穴が開き、隣の部屋まで見える。

82 歳の定胤は、まてまて、壁画だけは救出しろと、命令するが、そんなもん、待ってられるかい、と堂内の破壊を続け、堂内にも放水を続ける。火は 8 時半ごろに、ようやく鎮まった。

その日の午後、焼損した壁画に合掌する佐伯定胤管主の姿があり、朝日新聞の写真記者の平谷一登が、その姿をカメラにおさめた。この悲壮で、虚ろに壁画に向けて直立合掌、毘沙門天を呪える管主の姿は、昭和の歴史を語る時、しばしば登場する写真である。

法隆寺全焼と号外で、全国の人々に報道され、翌日の朝刊に、この焼損の壁画に合掌する写真が掲載された。



その後、現場検証を始めた清水義行部長刑事と白木久治郎刑事、当時ともに 29 歳は、

焼け焦がれた壁画をみながら、涙が止まらない。剥落した壁画の破片を、作業員が水で洗い流そうとするので、大声をあげて中止させ、石炭箱に集めさせ復元に役立てて下さいと、定胤に手渡した。この時、6号壁の裏の白壁から古人の落書きが現れた。

享保 17 年子 4 月 27 日 加賀金沢 嘉丸屋五兵衛

もろともに哀れと思へ山桜

花よりほかに知る人もなし

享保 17 年は、江戸の 1732 年である。これは、江戸の享保年間に修復されたときに落書きで書いたものと思われる。

法隆寺日記に、定胤の炎上の様子を次ぎの様に記している。

昭和 24 年 1 月 26 日水曜 快晴

一金堂火災之事

早朝六時？分頃修理工事事務所の「サイレン」鳴る普通の鳴らし方にも非常警報の鳴らし方に非ず。然る処金堂出火の報あり。首以下一同打驚き遽しく伽藍に走り到る此時火は炎々として屋上に吐き出あり。消防隊は当地及隣村より続々駆けつけて、ホースを取り付けつつありけり。貫首は直に金堂内陣に飛び込まんと思し衆人大に危険なるを見て「あぶない」と叫び皆々抱きかかえて階段下に連れ下ろしたり。自夫貫首は回廊金堂正東の辺りに退却佇立し、心に毘沙門天王の呪を称え冥護を祈れり。堂内の火は少々下火となるを以て、貫首は再度入堂を決心し、外陣迄入りたるも内陣皆一面の水に満され入る能はず。断念出堂したり。依而回廊南面金堂真正面の辺の古材の上に腰を下ろし依然毘沙門の呪を称えつつ其加護を祈れり。

壁画の損焼は以下のごとくで、修復不能である。

1 号壁	釈迦浄土変	構図はのこったが全体に変色
2 号壁	日光菩薩、半跏菩薩	変色、亀裂
3 号壁	観音菩薩	腰から下が剥落
4 号壁	勢至菩薩	顔面と胸剥落
5 号壁	月光菩薩 半跏菩薩	亀裂増大
6 号壁	阿弥陀浄土変	頭部欠損、右の侍者観音剥落
7 号壁	観音菩薩	亀裂
8 号壁	文殊菩薩	変色
9 号壁	弥勒浄土変	亀裂、下部変色
10 号壁	薬師如来、月光菩薩	大亀裂、破損激しい
11 号壁	普賢菩薩	輪郭のみのこる
12 号壁	十一面観音	輪郭が逆に鮮明になる

しかし、模写作業は、残骸の中から、できるだけのことをやろうと再開されている。だが、世の目は残酷で、厳しい。

模写をしてどうなるのだ、9年もかけて、何をしているのだ、無駄だ、写真でよからう。などと、批判の声があがる。

結局、金堂伽藍は修理の途中であったので、炎上したところは西岡棟梁が責任をもって修理することができるが、壁画は元通りにすることは不可能であった。

金堂炎上の原因は何か。出火は、失火と放火との、両線で捜査されていた。

結局、厳寒のために、壁画模写の画家たちのために用意した、電気座布団がショートして火を吹いたのではないかということになり、捜査は、画家が元のスイッチを消したか、消し忘れたかという点にしばられてきた。

この知らせを聞いた米国のラングドン・ウォーナーは、「法隆寺金堂の火災がもたらした東洋美術に対する損失は、これを西欧の美術にたとえると、コンスタンチノーブルの『ハグヤソフィア』、または、ローマの『システリーナ礼拝堂』が、焼失するようなことがあった場合に比すべきものである」と、説明している。

人の手による美術の破壊という汚点は、最近では、タリバンが2001年、平成13年3月、バーミヤンの大仏を爆破する事件があった。

炎上に隠された腥い人間模様

世界最古の木造建築として、清浄なる聖徳太子信仰を基に、災害から1300年も守られてきた法隆寺で、高僧の誉れ高い佐伯定胤の時代にあって、最悪の災難が突然起こったのである。

金堂が炎上し、至宝の壁画が一瞬にして焼け焦がれてしまった。定胤は無念、太子に申し訳ないという慚愧に堪えない気持ちで、悶々としていた。

法隆寺の火災の知らせをきいて、京都の清水寺の大西良慶師は驚き、近鉄で筒井駅まで来て、バスを待つ間がもどかしく、筒井駅から西の法隆寺まで5km、国道を走ったという。着くと、火事は寺務所だとおもっていたので、金堂だときいて腰が抜けてしまった。

佐伯を慰めたが、「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」というばかりで、大西は、太子さんに恨みをもつくらいに思ったという。

事後対策で、この清水の大西良慶師をはじめ、京都大学、大阪市立美術館、正倉院、奈良県知事、東大寺、興福寺、天理教らが見舞金やら、人手を派遣してくれた。

定胤の金堂、壁画を失ったことへの落胆の漢詩が残っている。

学人忘汲信泉清
徒弄戲論心自盲
失火一朝災聖殿
胸懷豈忍慘嗟情

現場検証と聞き込み捜査はつづいていたが、電気座布団からの出火が最も疑われた。しかし、この裏には、人間のどろどろとした腥(なまぐさ)い、人間不信が隠されていたのである。

この点については、当時問題になっていたのも、太田氏も知っておられたようだが、このような生臭いことを記述する気にはなれなかったのであろう。

太田氏は、新・法隆寺物語に「ところが、検察、警察の捜査が進むうち、寺内の人と人との反目があかるみに出て、一時は放火説も出た」、と一行だけ記載しているのみである。

高田氏の、『法隆寺日記をひらく』には、全く記載されていない。

しかし、金堂炎上から40年後の1989年、平成元年になって、新聞記者の遠山彰氏が、新聞連載小説「金堂炎上」で、やっぱり、法隆寺の歴史、日本の歴史、金堂炎上に汚点があったことを、実名入りで、ノンフィクションとして公表している。そして、当時の証言者として、模写に参加された、千葉柏市住人の創画会の井崎昭治氏が、電気座布団のスイッチの再度入れ直しをした人物がいたことを報告している。

遠山によると、この金堂の炎上の直前、正確には一週間まえの、昭和24年1月19日に、佐伯定胤の食事を担当していた斑鳩小学校の保健婦の上森キミさんが、午後9時に弥勒院に帰院したところ、門前に、紙包みが放置されていた。

翌朝、中身を確認するとまんじゅうが一個入っていて、裏面に白い粉がついていたので、不信におもい、県衛生課でしらべてもらおうと、昇承であった。

炎上の3日前の23日には、上森さんの卓上のいちごジャムの味が、おかしい、ザラザラしているというので、直ぐ吐いて、警察に連絡した。これも地検で精査すると、昇承であった。

警察は、これは定胤が溺愛していた執務長の吉田覚胤52歳の仕業で有ろう、と聞き込み捜査をはじめていた。その3日後の、1月26日に出火したのである。

吉田覚胤は5人の女性と付き合っていて、女クセがわるく、このことを周囲から注意されていた。とくに上森キミさんから、何度も注意されていたので、逆恨みで、毒をもったものと、警察は睨んでいた。そして、金堂炎上後も、この出火原因を究明する一方、放火のうたがいで、吉田覚胤自身、その関連者、もしくは、定胤管主への妬みで金堂に放火

したものがいるのではないかと、捜査していたのである。

吉田覚胤は写真が趣味で、現像の際に使用するための昇汞を保有していることを突き止め、覚胤が饅頭に昇汞を付け、上森さんを殺害しようと目論んだが、失敗し、事がバレないう、上森さんが金堂に放火したように見せかけたと推測し、裁判にかけたのである。

反対に、そもそも、毒饅頭も毒入りのジャムもなく、上森さんの狂言だとの見方もあった。上森さんが放火したか、5人の女のうち、だれかが、放火したのではないかとの推測もあり捜査したが、証拠がない。

地方新聞は、この毒饅頭と金堂炎上が定胤の勢力をそぐために、反対勢力が仕掛けたとすれば、夫れには十二分の成果をあげたといえと、残酷で、無責任な報道をしている。

しかし、奈良地裁の判決は吉田覚胤は無罪。出火の原因は電気座布団の製造に過失有りとして、国宝保存工事事務所の技師浅野、事務職員古西、三京社専務井上が禁錮1年、罰金千円の有罪判決となった。

吉田が佐伯定胤の失脚をねらって放火したのだらうと検察は彼を逮捕したが、結局、無罪で、吉田は法隆寺追放で、定胤は泣く泣く、彼を小さい寺に預けたのである。

そして、毒入りまんじゅうの事件真相は解明されないままとなっている。

定胤は昭和25年4月に引退し、佐伯良謙に譲り、その11月に聖徳宗をたちあげ、2年後の1952年、昭和27年11月22日まで活躍された。

努力の人、西岡棟梁と昭和天皇

鎌倉の『古今目録抄』に、五重塔の心柱の下に仏舎利六粒と鬚髻(しゅさつ; あごひげ)六毛が納められていると記載されているので調査していたが、大正15年1月に、奈良県古社修理技師の岸熊吉氏が、その仏舎利を発見していた。

通常、仏舎利のなかには、入滅した釈迦の遺骨の一部や、柩などの灰燼がはいっている。

この法隆寺の舎利容器は外から佐波理碗、金剛合子、銀製容器、筋製容器、硝子製の舎利びんからなっており、海獣葡萄鏡がたてかけてあった。

一端、この仏舎利を定胤の部屋に安置し、その後、関野、伊東博士の指導で、岸が写真を撮り、スケッチして、法要ののち、元に戻された。これらを秘密裡におこなったが、情報は漏れてしまった。

五重塔の修理が、西岡棟梁らによりはじまっていたので、この仏舎利については、委員会を作り、公開の方法について協議された。

この委員会の委員は羽田亨、岸熊吉、梅原末治、藤田亮策、石田茂作、小場恒吉、の六

人で、仏教と科学の両面で協議されたが、仏心重視で公開報道はしないことになった。

学問探究はもとより必要であるが、宗教の尊厳は犯すべからざるものであり、学者の研究が、信仰を無視し顧みないものであってはならない。しかし、文化国家にあつては、宗教家が宗教の神秘を偏重して、学問の自由を排してもいけない。これらを鑑み、舍利については仏心を重視し、公開しないことになったのである。

再採掘は、金堂炎上の10ヶ月後の昭和24年10月4日午前4時からおこなわれた。調査には三日間を費やし、金堂炎上での責任をとらなかつた、当時の高瀬文部大臣も奉拝している。法要ののち28日に元に戻され、昭和29年に複写は厳禁で、限定500部、記念誌が出版されている。

吉田茂は、昭和24年10月13日にモーニング姿で、法隆寺を訪れ、東西の頑固者、吉田と定胤という両横綱が法隆寺にて会見した。

昭和の大修理の締め括りとして、五重塔の落慶法要が、昭和27年5月18日におこなわれ、佐伯定胤は五重塔の修理完了に、「ああ、できた、できた、あんじょうできた。ようしてくれた」といい、西岡常一棟梁の労を犒った。

8月にウォーナーが来訪し、9月25日に世界仏教会議が東京、築地本願寺でひらかれ、佐伯定胤は、これに参加し、その2ヶ月後に黄疸で大阪大学附属病院に入院して、昭和27年11月22日に亡くなっている。

金堂の落慶法要は昭和29年11月3日の文化の日におこなわれた。定胤が、もっとも気にしていた金堂の修理は、彼の死後2年で完成したが、内陣の壁画のところは白壁になっていた。これに、朝日新聞の協力で、昭和47年11月、原寸大の写真がはめこまれたのである。

これらの昭和大修理には、大棟梁(大統領)といわれた宮大工の西岡楯光(明治17年-昭和50年; 1884-1975)があたり、その長男の西岡常一(1908-1995)が棟梁を引き継ぎ、全国から出向した多くの優秀な宮大工の真摯な努力と、技で、飛鳥の建築を再生させた。

西岡家は、祖父の常吉、楯光、常一の三代で、木を知り尽くした宮大工で、常一さんは奇蹟の人といわれ、白洲正子さんは常一棟梁を木の匠として絶賛されていた。

その、職人技は世界一と評され、法隆寺の大修理以降、奈良および全国の寺社の修理の注文が矢継ぎ早に殺到する。然し、西岡常一も平成7年になくなっている。

昭和54年12月5日に、昭和天皇が、60年ぶりに、法隆寺を訪問され、このとき、感慨深い、歌を披露された。

過ぎし日に 炎をうけし法隆寺 たちなほれるを けふはきて見ぬ

あとがき

奈良、ナラは、韓国語で、国を表す言葉である。

南都七大寺というのは、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺をいうが、東大寺の仏陀像は、世界最大で、751年に聖武天皇によって創建されたが、いままで、三度再建されている。

一度目は、855年、地震で大仏の首がおれ、頭が落ちたことが、平家物語にでてい

二度目は、1180年に平重衡の南都焼きで、灰燼に帰し、重源によって、再興された。

三度目は、1567年の松永弾正久秀と三好三人衆の戦いで、大仏殿がやけた。この時から、約130年間、大仏は野ざらしの状態、秀吉、家康、公慶上人によって1709年にやっと大仏殿が再建されたのである。

東大寺ですら、このような状態であったのに、少し離れた場所の法隆寺は、607年以来、大きな被害もなく、金堂炎上が、1400年間の最大の損傷であった。

飛鳥三大寺というのは、大安寺、飛鳥寺、川原寺であるが、大安寺は、現在、奈良北西部にあり、かつては飛鳥にあって、大官大寺といわれていた。

川原寺は、弘法大師にあたえられ、弘福寺と称していて、東寺の末寺であったが、戦国時代に焼失している。

飛鳥寺は、今も、一部、明日香村にのこされている。

以上のように、奈良の都、南都は、京都、北都より、歴史が古く、ほぼ日本書紀の時代にあたるため、現在の寺の所在と付合しないところがあり、地理的に理解出来ないことが多い。

たとえば、江戸の1772年、明和7年、本居宣長が吉野を詣でたことを『菅笠日記』に記しているが、このときは、初瀬から長谷寺、多武峠、吉野水分神社、壺坂寺、川原寺、天香具山、畝傍山、再び初瀬にもどってきている。

初瀬(泊瀬)は、今の、桜井市で、奈良市の南にあり、ここの長谷寺から、さらに南行し、多武峠(とうのみね)から吉野にはいり、帰路は今の高市郡の壺坂寺をおとずれ、明日香村の川原寺により、橿原から天香具山を東に、西に畝傍山をみて、さらに北上し、初瀬に戻っている。

法隆寺の夢殿の救世観音は沈水香という香木でつくられているという(実際は調査で楠)。沈水香は、重く、みずに沈む香木で、旃檀香という白檀の一種で、観音を彫り上げた残りを法隆寺におさめられたので、この香木を「法隆寺」という。

織田信長が正倉院から拝借した香木の方は、蘭箸待(らんじゃたい)といわれ苦楝子の原料で、この漢字には正倉院の東大寺の字がかくされている。このため、この香木のほうは別名、「東大寺」といわれている。

最後に、夢殿は、なぜ八角堂なのか。答えは、佐伯啓造編集の『夢殿と救世観音』の青木茂作氏の「夢殿に対する新考察」にあり、これによると、維摩経の観衆生品の、八つの未曾有難得の法によるのではないかと考察されており、さらに香積品の菩薩の八法とも考えられている。

維摩経を読まれた聖徳太子は自分の正殿を八角にされたという。もっともらしい考察であるので、ここに、のせておく。

八つの未曾有難得の法は、

1. 維摩詰(ゆいまきつ；維摩居士のこと)の部屋は、金色の妙光に照らされていて、日月の光がなくても、昼夜の別がない。
2. この部屋にとじこもるものには煩惱はない。
3. 帝釈天や梵天などの菩薩大士が集会している。
4. 大乘の六波羅密・不退転の妙法が説かれている。
5. たえず、天人によって音楽が奏でられていて、無量法化の音声聞こえる。
6. 衆宝山積みの四つの蔵があり、この宝物を、貧窮孤独の衆生に分けあたえられ、欲しければいくらでも無尽蔵に与え、限りがない。
7. 釈迦、阿弥陀、阿閼仏など、諸仏が十方無量、たちまちにして現れ法蔵を開く。
8. 嚴飾の一切諸天の宮殿と同じで、諸仏の浄土と同じである。

菩薩の心得るべき八法とは、

1. 有情を饒益して、報いを望まず。
2. 一切の群生に憂悩悲苦をうけながら、その功德を廻向して彼等に施すこと。
3. 一切の群生に慈悲心を平等に施し、自らは謙謙卑下すること。
4. 自らの驕慢を摧伏し、仏陀世尊を敬愛尊恭ること。
5. 未だ聞いたことのない経典についても、疑わず耳をかたむけること。
6. 声聞弟子と相違背せず、かれらの供養を妬(ねた)まず、恨まないこと。
7. つねに、自らの過ちを省みて、他人の短所を譏(そし)らないこと。
8. 一心に善根功德を集め楽しみつつ、妙道に修行すること。

維摩経をはじめて読まれた聖徳太子は、みずからの正殿、室を、維摩に因んで、八角とされた。これを、行信僧都が、天平 11 年に復興されたと、青木氏は考察している。

維摩居士の説く八つの未曾有難得の法は、後の浄土経に等しい。

参考文献

- 1) 太田信隆、『新・法隆寺物語』、昭和 58 年、集英社文庫、1983 年
- 2) 遠山彰、『金堂炎上』、平成元年、朝日新聞社、1989 年
- 3) 塚田武馬、『法隆寺伽藍諸堂巡拝記』。明治 30 年、辻本刊、1895 年
- 4) フェノロサ、『東亜美術史綱』、昭和 13 年、創元社、1938 年、有賀長雄訳
- 5) 佐伯啓造、『夢殿と救世観音』、昭和 18 年、鶴故郷舎出版部、1943 年
- 6) 春山武松、『法隆寺壁畫』、昭和 22 年、朝日新聞社、1947 年
- 7) 高田良信、『法隆寺日記をひらく』、昭和 61 年、NHK ブックス、1986 年
- 8) 本渡章、『奈良名所むかし案内』、平成 19 年、創元社、2007 年
- 9) 佐伯啓造、『夢殿と救世観音』、昭和 18 年、鶴故郷舎出版部、1943 年
- 10) 青山茂、『斑鳩の匠宮大工三代』、平成 15 年、平凡社、2003 年